

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

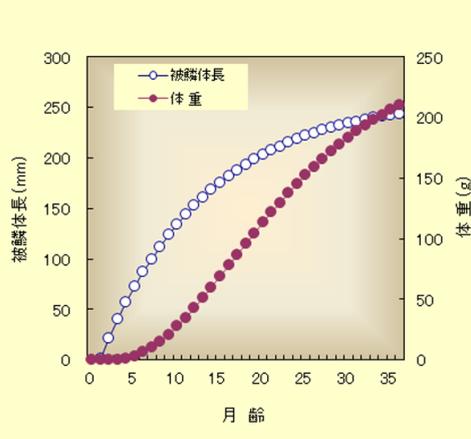
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 3年程度
成熟開始年齢： 1歳(100%)
産卵期・産卵場： 周年(九州周辺水域)、春～夏(日本海北部)
索餌期・索餌場： 夏～秋季、日本海西部～東シナ海
食性： カイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者： 大型魚類、ほ乳類、海鳥類、頭足類

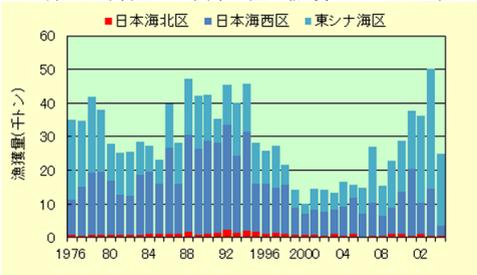


漁業の特徴

東シナ海区(福岡県～鹿児島県)では中小型まき網や棒受網により、日本海西区(福井県～山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網などにより漁獲され、日本海北区(石川県・富山県)では定置網などで混獲される。本系群は我が国の他、韓国及び中国でも漁獲されるが近年の漁獲量は不明である。

漁獲の動向

漁獲量は1976～1998年までは毎年2万トンを超えていたが、2000年には1万トンまで減少した。2009年以降増加して、2013年には1976年以降で最大となる5万トンとなったが、2014年は大きく減少して2.5万トンであった。海区別では東シナ海区と日本海西区が漁獲のほとんどを占めている。

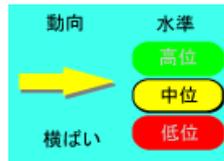


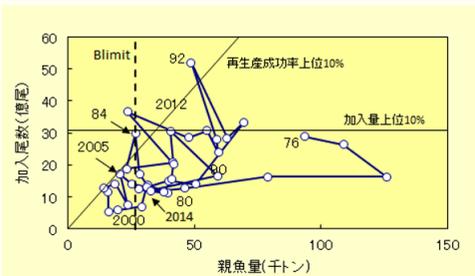
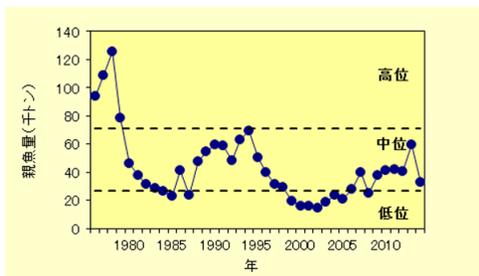
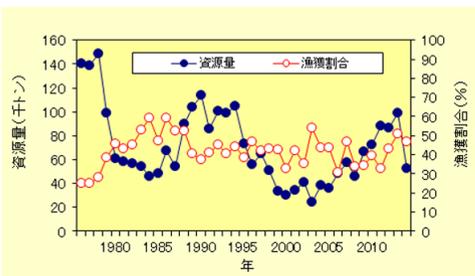
資源評価法

月別漁獲量と体長測定資料を用いたコホート解析により資源量を推定した。

資源状態

資源量は増減を繰り返しながら推移している。近年では2003年以降増加傾向にあったが、2014年は前年の9.9万トンより大きく減少し、5.3万トンと推定された。親魚量と加入尾数には正の相関が認められるが、親魚量が多くなると加入尾数は頭打ちになる傾向がある。資源回復を図る閾値となるBlimitは、1984年の親魚量(2.7万トン)とした。低位と中位の境界はBlimit、中位と高位の境界は親魚量の上位10%の値(7.1万トン)とした。2014年の親魚量は3.3万トンでBlimit(2.7万トン)を上回ったが、親魚量の上位10%の値を下回ったため、資源水準は中位と判断した。近年5年間(2010～2014年)の資源量の推移から、資源動向は横ばいと判断した。





管理方策

2014年の親魚量はBlimit近くにあり、現状の漁獲圧(F_{current})で漁獲すると、2015年以降の親魚量はBlimitを下回ると予想される。そのため、親魚量を増加させることを管理目標としてF50%SPRにより2016年ABCを算出した。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合 (%)	2016年ABC (千トン)
F50%SPR	Limit	0.60	30	10
	Target	0.48	26	8

- ABC算定規則1-1)-(1)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量
- Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大が期待される漁獲量。F_{target} = α F_{limit}とし、係数αには標準値0.8を用いた
- 漁獲割合は、2016年の漁獲量/資源量
- F値(漁獲係数)は各年齢の平均

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 2014年の親魚量は3.3万トンで、Blimit(2.7万トン)を上回っている

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧が継続した場合、親魚量は2015年以降にBlimitを下回ることが予想される
- 親魚量の増加を図ることを管理目標とし、2016年ABCを算出した

執筆者: 安田十也・福若雅章・黒田啓行

資源評価は毎年更新されます。